

いすのせいざ

作: 麥生田兵吾

これら写真に写っているのは、奈良の障がい者施設で実際に使われている椅子です。
ギシリッ ドサッ ヨッコラッショ 椅子に人が座ります。
椅子にはひとの体の形が跡が、ちょっとづつ溜まっていきます。
人の跡がたまり過ぎた椅子は、ボロボロに、ポンコツに見えたりしますが、
だからこそ余計に人に愛されて座られ続けてしまいます。
人の跡がそのまま椅子の表情です。

障がい者施設にいる人は、障害のある人と障害のない人がいます。
しかし彼らを写真に撮ってみると、障害のある人ない人と区別が付きません。
どうしてでしょうか。
試しに写真に「障害のある人」と言葉を添えてみると、たちまちその人は障害のある人に見えてきました！
写真と言葉の組合せで、イメージというのは恐ろしく変わってしまうようです。
しかし写真家としては、写真だけで表現したいものです。
「障害のある人」を「障害のある人」に見ただけでわかるように演出すればよいでしょう。
「障害のある人」ってどんなイメージがあるのでしょうか？
もしかしたらマイナスのイメージが多いのでしょうか？
では演出するとしたら、そのマイナスのイメージを誇張したり、
マイナスのイメージを逆手にとって明るすぎる演出をしたりすれば、
きっと「障害のある人」が写るにちがいはありません。

写真制作にあたって障がい者施設に通い、そこでたくさんの人と出会いました。
私は出会ったひとびとの心の豊かさと思いの輝きを目の当たりにし、まったく感動してしまいました。

「障害のある人」が障害のある人らしく写る写真を手に入れて、私は心底がっかりしてしまいました。
だって、そこには私が実際に出会い大好きになった人ではなく、
全く違う「誰かが(きっと社会が)想像し期待する」姿で写ってしまっているからです。
まるで別人です。
だから演出なんてしたくなくなりました。
しかしですよ？
ちっとも、ひとかけらも演出のない写真なんてあるのでしょうか？
私は悩んでしまいます。

障害のある人
障害のない人
すべて言葉で、すべてイメージです。
予め天空に描かれた事柄なのです。しかも人の手によって描かれたものです。

言葉やイメージが先行しない人々の姿を表現するための被写体を、私は探すことにしました。
そして見つけたのが、施設で使われている椅子です。
ぱっと見て面白くもなんともない椅子ですが、何かをこちらへ話しかけてきます。
私は、椅子たちの声に耳を傾けるという退屈な作業に一生懸命にならなければなりません。
椅子の声を写真に変換することが、表現の入口になりました。

突然気づくのです。
ああ、最初にうかんだ「演出する」って気持ちは、なんて強い立場から思っていたことなんだろう。
私は、おしりを床に落として椅子の小さな声を聞くことで、自分を小さく弱くする必要性を、
いえいえ、自分こそがちっぽけで弱弱しい存在なのだを知るのです。

これらの椅子には、演出も先行したイメージもありません。
ひとの跡だけが残っています。
おしりの跡がほとんどですね。
汚いおしり、可愛いおしり、いろんなおしり、いっぱいあって、そしてみんな同じようなものです。

おしりのイメージなんて決まってはいません。
その時々で違って見えるだけなのです。
違うけど変わらない、それがいいのです。
わたしは、これらの椅子によって、ようやく出会った人々と近づくことができたように思いました。

天空にはりついた星座だって、地球から遠く離れてみたら全然違う形になってしまいます。
ですから人は想像で、遠くを思えばきっとよいのです。

人の想像力は、宇宙船よりうんと遠くへ行くことができるのですから。

おわり